

2010年2月

奈良県生駒山を登る冬の早朝は特に寒く感じた。山頂近くに本山寺という寺があり、そこで行われる托鉢に師僧と参加するために訪れた。真言宗の僧侶となる得度を昨年12月に当麻寺中之坊で受けた私にとって、これが僧侶として初めての托鉢である。黒衣に袈裟、托鉢道具を身につけた私は、これが虚無僧の気持ちかと考えを巡らした。15名の僧侶が集い、寺の大門前にある階段で御経を唱えた。冷たい山の空気の中で念仏を繰り返して唱えると昏睡状態に陥ったようであった。

師僧は尺八奏者である私に、念仏の代わりに尺八を演奏できるように尺八を持ってこいと指示した。四国八十八か所の巡礼で古典本曲を演奏したときのことを思い出した。尺八と念仏の音に没頭していくと、深い感情が空気を満たす。

それまでは虚無僧の衣装で演奏することはなかった。天蓋をかぶって演奏することに哲学的な意味を見つけられなかったからだ。ハロウィーンの仮装のごとく天蓋を着けて演奏する演奏家は多いが、私はその衣装に精神的な意味や利点を見いだせずにいる。実用性の点から考えても、頭部の動きを伴う激しく速い現代の演奏テクニックで演奏するには天蓋は邪魔になるだけである。しかし、現代の考え方を伝統道具に適用しようとしていたことに気付いた。江戸時代の虚無僧の気持ちで天蓋を考えていなかったのである。天蓋はつばの広い僧侶の傘である菅笠又は托鉢傘から発展したもので、身元確認と後に政府のスパイとして活動するために普化宗で広く使われるようになった。虚無僧の長い歴史のなかでも比較的新しい習慣ではあるが、虚無僧のイメージを位置づけるものとなった。虚無僧は行脚しながら施しを受け、呼吸に集中してゆっくりとした古典本曲を演奏していた。

年配の方と話をすると、虚無僧が行脚中に近所で演奏していたのを幼少時代に見たことがあるとおっしゃる方によく遭遇する。この伝統を次の世代にも記憶しておいてもらえるように虚無僧の服装での演奏を続けていきたいと思う。本山寺において虚無僧の心で“山谷”という本曲を演奏した。この曲は日本北部の厳しく孤独な雰囲気を感じられる厳粛な曲である。演奏時間は11分と長く、感情を抑えて吹かなければいけない曲である。寺の階段から奈良を見降ろしながら演奏した。結露が尺八から滴り落ち、繰り返して、ゆっくりと吐く息で空気を白くさせながら。ついに寒さで尺八の穴が感じられなくなるまで演奏して念仏に戻った。“山谷”は孤独を表現した楽曲であるが、僧侶が唱える念仏と尺八の音が重なると一体になったように感じられた。1人自宅や自然の中で吹いていても、この曲を演奏するといかに自分が外の世界とつながっているかを感じることができる。